

建設に伴うもので、主な検出遺構は、古墳時代中・後期の土坑、古墳時代中期の竪穴状遺構などである。

木簡は、集落をはずれた西よりの谷状を呈する旧表土層から一点出土した。

# 8 木簡の釈文・内容

(1) 「□□」巻斗

(137)×25×5 081

墨痕はすべて残存していないが、文字の跡が浮き上がっている。一文字目は「四」の可能性もある。

文字の判読・写真撮影については田中一穂氏にお願いした。

# 9 関係文献

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団『北陸新幹線関係発掘調査報告書Ⅳ 大角地遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書一七三、二〇〇七年)



(山岸洋一)

## 新潟・窪田遺跡 くぼた

1 所在地 新潟県村上市南田中字窪田

2 調査期間 二〇〇六年(平18)四月～二月

3 発掘機関 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団・国際航業(株)

4 調査担当者 前川雅夫

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 八世紀・一二世紀～一四世紀・一七世紀～一八世紀

紀

# 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

窪田遺跡は越後平野の北部、荒川右岸の沖積微高地に立地する。



(中条・村上)

調査の結果、一七世紀～

一八世紀を中心とする河川護岸施設や漁撈施設、一二世紀後半～一四世紀前半の集落、八世紀を中心とする集落をそれぞれ検出した。

木簡は、中世から近世にかけて存在した河川SR一から五点、中世の井戸(S

E五二二から二点、計七点出土した。SR一は最大幅二七m深さ一・四m（標高マイナス二・二m）を測り、調査区内で長さ六二mにわたって検出した。河川内では一六〇〇本の杭を用いた護岸を大きく三条確認した。川上にあたる調査区東側には杭列を狭くし、川底（五×一〇mの範囲）に石を敷き詰めたところがあり、その中心には四つ手網やコドなどの漁撈施設に伴う杭（エビス杭）二本も検出されている。SR一から出土した木簡(1)～(5)の内、(1)(2)(5)は漁撈施設内の埋土からの出土である。SE五二二は長径六九cm深さ一七四cmの素掘りの井戸で、埋土中位から(6)が表の上に、(7)が立てられた状態で出土した。なお、SE五二二からは漆器稜碗や田下駄なども出土している。

## 8 木簡の釈文・内容

## SR一

- (1) 「☐ 奉 ☐ 大日如来祕密供諸願成就 ☐ ☐ 瑜海敬 ☐ ☐」  
 [者カ] [白カ]  
 445×87×8 011
- (2) (バン)(カーン)  
 音 部  
 (78)×21×2 019
- (3) 「松」  
 180×75×23 061

(4) 「銀将」

30×25×11 061

(5) 「久」

283×70×27 061

## SE五二二

(6) 「こ、の ☐ ☐ ひい

なりこれは ☐ ☐ かり

たらひと ☐ ☐ あるへく候

七月六日

(花押) 316×98×4 061

(7) 「こ、の ☐ ☐ ひいハ

☐ ☐ り

☐ ☐

七月 ☐ ☐

(花押) 316×108×4 061

(1)は祈願札である。上端は山形に作り、下端に向けて狭まる。表面下半にわずかではあるが墨痕部分の盛り上がりを確認できる。このことから祈願札がそれほど長い期間でないにせよ一定期間風雨や雪に曝されやすい状況にあったと推測される。一文字目の梵字は「ア」の可能性が高い。スギ材。

(2)は篋状の板材に梵字二字が墨書されていることから呪符と考え

145

られる。スギ材。

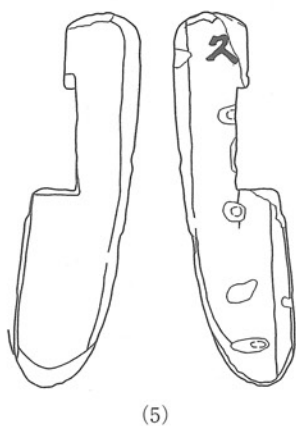
(3)は裏面に墨書がある舟形で、底面から舳先にかけて溝が削り込まれている。スギ材。(4)は将棋の駒。材はニシギキ属。(5)は鋏の欠損品で、裏面に墨書がある。

(6)と(7)は本来、同一個体の折敷の底板であった。片面のみ調整し、もう一面はワリ／ママ。(6)はワリ／ママの面の一部を平滑に調整し、(7)は調整すみの面に墨書された。(6)の六カ所の穿孔、(7)の五カ所の穿孔と一カ所の棧綴じ皮は転用前の痕跡である。スギ材。

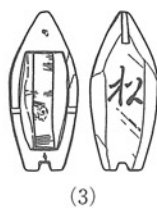
## 9 関係文献

新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XⅢ 窪田遺跡Ⅰ』(新潟県埋蔵文化財報告書一七六、二〇〇七年)

(木村雄司)



(5)



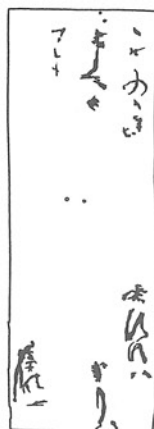
(3)



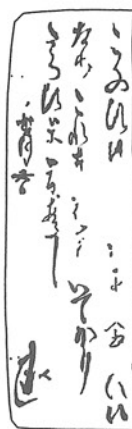
(2)



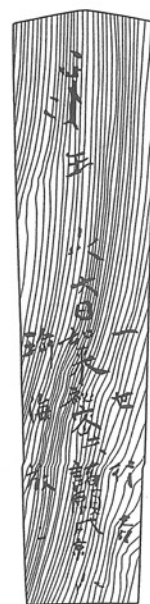
(4)



(7)



(6)



(1)